

<p>付着珪藻板飼育時の照度が稚ナマコの成長と生残に及ぼす影響</p> <p style="text-align: right;">山浦啓治・江口勝久</p> <p>付着珪藻を餌料とした稚ナマコ飼育時における適正照度を明らかにするため、照度（遮光率）の異なる3～4区の飼育試験区を設定し、各試験区での稚ナマコの成長と生残を比較した。その結果、アカナマコ、アオナマコの飼育試験に共通して、飼育時の照度が高いほど（遮光率が低いほど）生残、成長共に良くなるという結果が得られた。遮光率別の各試験区の付着珪藻の種類、細胞密度、被覆度を調べた結果、稚ナマコの餌料として適する種類の量は照度が高いほど多く、このことが飼育結果に反映していると考えられた。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7（1－4）2015</p>	<p>稚ナマコ（アカナマコ）飼育における付着珪藻以外の餌料の比較</p> <p style="text-align: right;">江口勝久</p> <p>稚ナマコ飼育工程における付着珪藻と併用効果の高い餌料を明らかにすることを目的とした餌料試験を実施した。</p> <p>当センターの飼育方法に依った着底直後～15日程度までの餌料としては、用いた3種（浮遊珪藻、海藻粉末、付着珪藻粉末）の餌料の中で、浮遊珪藻が適すると考えられた。また、着底後15日以降の餌料としては、海藻粉末のマコンブ粉末が適すると考えられた。今後、マコンブ粉末を主体とし、他の成分の添加等を検討し、稚ナマコ用配合餌料の改良を行っていく予定である。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7（5－9）2015</p>
<p>マナマコの害敵生物による食害について（室内試験）</p> <p style="text-align: right;">山浦啓治・真崎邦彦</p> <p>マナマコの効果的な放流方法を確立するため、室内試験により、害敵生物による食害状況を明らかにした。その結果、各種害敵生物（イトマキヒトデ、イシガニ、カワハギ、メジナ）がマナマコを捕食または攻撃することが確認された。また、マナマコのシェルターとして、玉石はイトマキヒトデやイシガニからの食害を抑える効果がみられたが、害敵生物が魚類の場合、効果は認められなかった。</p> <p>本研究で得られた結果は、室内で、害敵生物が稚ナマコを捕らえやすい環境下での結果であり、今後、天然海域において害敵生物による食害状況について調査を行う必要がある。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7（11－13）2015</p>	<p>佐賀県玄海海域におけるカタクチイワシ漁業に関する考察Ⅰ－玄海海域における来遊状況の推定－</p> <p style="text-align: right;">寺田雅彦</p> <p>玄海海域におけるカタクチイワシ生息状況の推定を行うとともに対馬暖流系群資源との関係性を解析することで、玄海海域におけるカタクチイワシ漁獲量へ与える影響について考察を行った。1976年から2005年までの肥前統括支所のカタクチ加工品の取扱量を解析した結果、漁期が春夏漁と秋漁に分けられ、前者は比較的沖合で発生（孵化）した群が来遊してきたものを、後者は比較的沿岸域で発生した群を漁獲している可能性が高いと推測された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7（15－19）2015</p>
<p>（短報）温排水影響下における潮干帯生物の変遷</p> <p style="text-align: right;">寺田雅彦・増田裕二・古賀秀昭</p> <p>玄海原子力発電所から排出される温排水の影響調査として行われている付着生物調査の結果について取りまとめを行った。生物の変遷を概略的にみるため、1974年以降2012年まで4年おきに10回分の資料を対象として、冬季の調査結果を資料として用いた。その結果、玄海原子力発電所周辺海域では、付着生物の動物にはあまり変化は見られなかったものの、植物では、大型褐藻類が減少し、紅藻類の無節サンゴモ、有節サンゴモが増加していたことから、玄海原子力発電所周辺では藻類の組成に変化が見られた。しかしながら、取水口側、放水口周辺どちらにおいても変化が確認されており、組成の変化の要因として温排水の影響のみではなく、地球温暖化の影響もあると推測された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7（21－25）2015</p>	<p>（短報）2013年7月に唐津湾内で見られた2種のナマコ類</p> <p style="text-align: right;">寺田雅彦・山名祐介</p> <p>唐津湾内で、2013年7月上旬、小型底曳網漁業の漁業者から見慣れない生物が混獲されるとの情報を得た。この生物は有害生物のグミ <i>Cucumaria ethinata</i> と類似していることから、今後の状況次第では操業に支障をきたす可能性があると考えられたため、生物の同定、入網状況等の聞き取り調査および分布調査を行った。その結果、今回確認した2種のナマコ類のうち1種は、棘皮動物門ナマコ綱樹手目グミモドキ科 <i>Phyllophorus hypsioryga</i> に類似していたが、種を特定することは出来なかった。もう一種はナマコ綱隠足目カウディナ科の <i>Caudina zhejiangensis</i> と同定された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7（27－29）2015</p>

<p>(ノート) 佐賀県玄海海域におけるイカナゴ <i>Ammodytes personatus</i> の漁獲量の推移</p> <p style="text-align: right;">寺田雅彦</p> <p>イカナゴは漁獲対象物としてだけでなく、他の魚類の餌料として非常に重要な生物であり、漁獲量の動向を把握することは、海洋生態系の食物連鎖構造の変化を把握する上で重要であると考えられるため、今回は統計データを用いて漁獲動向を把握した。玄海地区におけるイカナゴの漁獲量は、1900年代には100～500トン程度で漁獲されていたものの1910年～40年まではほとんど漁獲がなされていなかった。1940年代に入ると漁獲量は増加し、最大で1600トンの水揚げが記録されていた。その後、1950年代まで漁獲量が高い時期が続くものの、1960年代以降徐々に減少し、1978年以降漁獲されなくなり、1990年以降では1996年に2トン漁獲されたのみであった。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7 (31 - 32) 2015</p>	<p>(ノート) 佐賀県玄海周辺海域におけるグミ <i>Cucumaria echinata</i> の分布の変遷</p> <p style="text-align: right;">寺田雅彦</p> <p>グミ <i>Cucumaria echinata</i> は、佐賀県玄海海域において1996年から確認されるようになり、1999年春以降は唐津市小川島以東の海域において大量発生し、漁業に支障をきたすようになったため、玄海水産振興センターでは、グミの生息状況を把握することを目的とし、毎年調査を行った。その結果、1999年～2001年の調査では、玄海全域に分布していることが確認されたが、2004年以降は出現海域が減少する傾向がみられ、2009年以降はほとんどの地点で確認されなくなった。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7 (33 - 36) 2015</p>
<p>(ノート) 2013年夏季に佐賀県北部沿岸域で発生した <i>Karenia mikimotoi</i> 赤潮</p> <p style="text-align: center;">西山嘉乃・河口真弓・吉田幸史・野口浩介・藤崎 博・寺田雅彦・明田川貴子・江口泰蔵</p> <p>2013年夏季に佐賀県北部沿岸域において渦鞭毛藻 <i>Karenia mikimotoi</i> が広域で確認された。最高細胞密度は、唐津湾では60,000 cells/mL、鎮西町・呼子町管内では1,340 cells/mL、伊万里湾では13,700 cells/mL、仮屋湾では62 cells/mLとなり、離島のうち神集島においても758 cells/mL 確認された。漁業被害は、唐津湾での被害額約4百万円をはじめ、鎮西町・呼子町管内においても天然・蓄養魚介類に確認された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7 (37 - 48) 2015</p>	<p>(ノート) 2013年から2014年にかけて佐賀県仮屋湾で発生した <i>Alexandrium catenella</i> による二枚貝の毒化</p> <p style="text-align: center;">河口真弓・西山嘉乃・吉田幸史・野口浩介・煙草谷教正・江口泰蔵</p> <p>2013年4月に佐賀県仮屋湾で、<i>A. catenella</i> による赤潮が発生し、仮屋湾産の天然アサリから規制値（麻痺性貝毒4MU/g）以上の麻痺性貝毒が検出された。なお、佐賀県北部沿岸域において <i>A. catenella</i> はしばしば確認されるが、赤潮の発生は、1976年以降初めて確認された。</p> <p>さらに、仮屋湾において、同年12月に <i>A. catenella</i> の増殖を確認し、翌2014年1月には仮屋湾産養殖マガキから規制値を超える麻痺性貝毒が検出された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7 (49 - 55) 2015</p>
<p>(ノート) 伊万里湾佐賀県海域における <i>Heterocapsa circularisquama</i> 赤潮および貧酸素水塊の発生による養殖マガキのへい死への影響 (2013)</p> <p style="text-align: center;">河口真弓・西山嘉乃・野口浩介・吉田幸史・藤崎 博・寺田雅彦・明田川貴子・江口泰蔵</p> <p>伊万里湾佐賀県海域において8月20日から9月18日にかけて <i>Heterocapsa circularisquama</i> 赤潮が発生した。また、ほぼ同時期に貧酸素水塊が発生するとともに、表層水温は最高で32℃を超えた。漁業被害は、養殖マガキをはじめとする、天然および養殖二枚貝類のへい死が報告された。</p> <p>大浦浜地先における養殖マガキのへい死は、2m以浅では <i>H. circularisquama</i> 赤潮および高水温の影響が、また、2m以深では貧酸素水塊による影響が強かったものと推測された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報7 (57 - 64) 2015</p>	